

日本人なら知っておきたい「天皇」のこと

● 天皇の起源

皇室の系図は『古事記』『日本書紀』を始めとする史書に基づいて作られ、その起源は神武天皇元年（紀元前 660 年）に即位した神武天皇、更にはその始祖である天照大御神に始まるとされている。

天照大神(アマテラスオオミカミ)が、孫の瓊瓊杵尊(ニニギノミコト)に国土の支配者として天降るようにと命令し、『三種の神器』を授け、高千穂の峰に降臨(天孫降臨)したのが皇室の祖先とされている。

神々が紆余曲折を乗り越えてようやく国造りができて、瓊瓊杵尊のひ孫である神武天皇が初代天皇になったとされている。明治政府から戦時中まで、国定教科書では神武天皇元年を紀元元年とする神武天皇紀元(皇紀)が採られていた。

歴史的に証明できる皇室の起源は、ヤマト王権の支配者・治天下大王(大王「おおきみ」)が統治していた古墳時代辺り迄とされている。

3 世紀中葉以降に見られる前方後円墳の登場は日本列島における統一的な政権の成立を示唆しており、この時に成立した王朝が皇室の祖先だとする説や、弥生時代の近畿地方にあった場合の邪馬台国の卑弥呼の系統を皇室の祖先とする説、皇室祖先の王朝は 4 世紀に成立したとする説、など多くの説が提出されており定まっていない。

『古事記』(日本最古の歴史書)

中大兄皇子(天智天皇)らによる蘇我入鹿暗殺事件(乙巳の変(いっしのへん、おっしのへん))に憤慨した蘇我蝦夷は大邸宅に火をかけ自害した。この時に朝廷の歴史書を保管していた書庫までもが炎上したと言われる。『天皇記』など数多くの歴史書はこの時に失われ「国記」は難を逃れ天智天皇に献上されたとされるが、共に現存しない。壬申の乱後、天智天皇の弟である**天武天皇**が即位し、『天皇記』や焼けて欠けてしまった『国記』に代わる国史の編纂を命じた。その際、28 歳で高い識字能力と記憶力を持つ**稗田阿礼**に『帝紀』及『本辭』(『旧辭』)などの文献を「誦習」させた。その後、**元明天皇の命**を受け、**太安万侶**が阿礼の「誦習」していた『帝皇日繼』(天皇の系譜)と『先代旧辭』(古い伝承)を編纂し、『古事記』を完成させた。

『日本書紀』(日本最古の奈良時代の勅撰歴史書)

日本紀(にほんぎ)、略して紀とも。**天武天皇の第 3 皇子舍人(とねり)親王**が勅を奉じて**太安麻侶**(おおのやすまろ)らと編纂(へんさん)、720 年に成立。30 卷(『続日本紀』に系図 1 卷を付すとあるが現存しない)。巻 1, 2 は**神代**、巻 3~30 は**神武天皇から持統天皇**までを編年体で記述。ほぼ同時代の『古事記』と合せて「記紀」と称される。各時代の記事は『古事記』よりも詳細で、異説、異伝を載せ編纂態度も合理的、客観的であり、史書としてはるかに整っている。神代巻や古い時代の巻は多量の神話、伝説を含み、また歌謡 128 首をもつ点など、上代文学史上においても貴重な作品である。

『三種の神器』



天皇の踐祚に際し、この神器のうち、八咫瓊勾玉ならびに鏡と劍の形代を所持することが皇室の正統たる帝の証しであるとして、皇位継承と同時に継承される。だが即位の必須条件とはされなかった場合もあり、後鳥羽天皇などは神器継承なしに即位している。

現在では草薙劍（くさなぎのつるぎ）は熱田神宮に、八咫鏡（やたのかがみ）は伊勢神宮の皇大神宮に、八咫鏡の形代は宮中三殿の賢所に、それぞれ神体として奉斎され、八咫瓊勾玉（やさかのまがたま）は草薙劍の形代とともに皇居・吹上御所の「劍璽（けんじ）の間」に安置されている。しかし同皇居内に皇族らが住みながらその実見は未だになされていない。

『古事記』では天照大御神が天孫降臨の際に、瓊瓊杵尊に「八尺の勾璽（やさかのまがたま）、鏡、また草薙（くさなぎの）劍」を神代として授けたと記されている。

● 歴代天皇

歴代天皇を確定するための基準が定まったのは、大正時代末期のことである。このとき示された基準によって、「歴代天皇は125代、123人。」という現在の歴代天皇の形が確定している。

代数	名前	よみかた（即位年）	備考
上古・弥生時代(前 660 年～250 年頃) 倭に 100 以上の小国、邪馬台国は 30 ほどの小国連合			
初代	神武	じんむ（前 660）	邪馬台国より東遷？ 神話の世界では瓊瓊杵尊のひ孫？
第 2 代	綏靖	すいぜい	欠史 1 代
第 3 代	安寧	あんねい	欠史 2 代
第 4 代	懿徳	いとく	欠史 3 代
第 5 代	孝昭	こうしょう	欠史 4 代
第 6 代	孝安	こうあん	欠史 5 代
第 7 代	孝霊	こうれい	欠史 6 代
第 8 代	孝元	こうげん	欠史 7 代
第 9 代	開化	かいか	欠史 8 代
第 10 代	崇神	すじん（71）	初の実在天皇か？
第 11 代	垂仁	すいにん	皇女が倭姫命
第 12 代	景行	けいこう	九州熊襲征伐、日本武尊の父
第 13 代	成務	せいむ	大臣竹内宿禰が政務を総括
第 14 代	仲哀	ちゅうあい	熊襲征伐中に筑紫で没

古墳時代(250年頃～592年) 大和朝廷が国内を統一、前方後円墳等の古墳文化

第15代	応神	おうじん (270)	実在が濃厚であるある最古の天皇。全国八幡神宮の祭神
第16代	仁徳	にとく	難波高津宮 (難波天皇)
第17代	履中	りちゅう	倭王 讃?
第18代	反正	はんぜい	履中の同母弟、倭王 珍?
第19代	允恭	いんぎょう	反正の弟、倭王「済」
第20代	安康	あんこう	倭王「興」
第21代	雄略	ゆうりゃく	倭王「武」
第22代	清寧	せいねい	非実在説もあり。
第23代	顕宗	けんそう	履中の曾孫、兄と皇位を譲りあい
第24代	仁賢	にんけん	顕宗の兄、雄略の女を皇后とした
第25代	武烈	ぶれつ	紀では残虐性を記す、平郡真鳥親子を殺害
第26代	継体	けいたい (507)	越前から招いた天皇? 万世一系断絶の疑い。応神天皇の5世孫?
第27代	安閑	あんかん	継体天皇の第一皇子
第28代	宜化	せんか	継体の第二皇子
第29代	欽明	きんめい	継体の第四皇子。百濟から仏教が伝来。物部氏と蘇我氏の2極。
第30代	敏達	びたつ	天然痘大流行。天皇も病で崩御
第31代	用明	ようめい	物部・蘇我の対立に決着。物部大連家は滅亡。
第32代	崇峻	すしゅん	大臣: 蘇我馬子

飛鳥時代(592年～710年) 国号が倭から日本へ。仏教、国際色が強い文化。

第33代	推古	すいこ	我が国初の女帝。聖徳太子を摂政とする。
第34代	舒明	じょめい	父: 押坂彦人大兄皇子。大臣: 蘇我蝦夷
第35代	皇極	こうぎよく	女帝 大臣: 蘇我蝦夷 →乙巳の変
第36代	孝徳	こうとく	中大兄皇子・中臣鎌子の傀儡。大化の改新
第37代	齋明	さいめい	女帝 皇極の重祚(再度即位する事をいう),百濟救援軍大敗
第38代	天智	てんじ	中大兄皇子。飛鳥から近江へ遷都
第39代	弘文	こうぶん	大友皇子。皇妃: 十市皇女。明治3年に皇位追贈
第40代	天武	てんむ	大海人皇子。壬申の乱後即位 (飛鳥浄御原宮)
第41代	持統	じとう	女帝 天武天皇の皇后。藤原宮造営
第42代	文武	もんむ	草壁の子、大宝律令制定 (倭から日本へ)

奈良時代(710年～794年) 平城京を中心とした貴族・仏教文化。古事記(歴史書)、日本書紀(歴史書)。

第43代	元明	げんめい	女帝 草壁の妃、母: 蘇我姪娘
第44代	元正	げんしょう	女帝 養老律令制定、日本書紀完成、独身
第45代	聖武	しょうむ	長屋王の変、藤原広嗣の乱 (恭仁京、難波宮、紫香楽宮)
第46代	孝謙	こうけん	女帝 橘奈良麻呂の乱、道祖王廃し大炊王に譲位
第47代	淳仁	じゅんにん	恵美押勝の反乱時に廃帝となる。舎人親王の子。
第48代	称徳	しょうとく	女帝 孝謙の重祚、弓削道鏡を法王とする
第49代	光仁	こうにん	天智の孫、蝦夷を大伴駿河麿に撃たせる

平安時代(794年～1185年) 藤原氏一族による摂関政治(摂政、関白)。

その後上皇らによる院政、平氏・源氏による武士の台頭

第50代	桓武	かんむ	坂上田村麻呂をして蝦夷を平定。平安京の始まり。
第51代	平城	へいぜい	薬子の変。ノロゼとなり平城宮にこもる
第52代	嵯峨	さが	皇后：橘嘉智子(檀林皇后)
第53代	淳和	じゅんな	平城・嵯峨の弟、嵯峨の子正良に譲位
第54代	仁明	にんみょう	承和の変(橘逸勢ら)
第55代	文徳	もんとく	太政大臣：藤原良房
第56代	清和	せいわ	応天門の変
第57代	陽成	ようぜい	摂政：藤原基経、極悪之君と評さる
第58代	光孝	こうこう	仁明の第三皇子
第59代	宇多	うだ	関白：藤原基経、菅原道真を登用
第60代	醍醐	だいご	延喜聖主と讃えらる
第61代	朱雀	すざく	摂政/関白：藤原忠平、承平天慶の乱
第62代	村上	むらかみ	後世治績を天曆の治と称される
第63代	冷泉	れいぜい	実権：摂政/関白藤原実頼、安和の変
第64代	円融	えんゆう	実権：藤原一族
第65代	花山	かざん	摂政：藤原伊尹、兼家に退位させらる
第66代	一条	いちじょう	関白兼家が擁立、王朝文学の絶頂期
第67代	三条	さんじょう	藤原道長との軋轢
第68代	後一条	ごいちじょう	平忠常の乱
第69代	後朱雀	ごすざく	関白：藤原頼通
第70代	後冷泉	ごれいぜい	前九年の役
第71代	後三条	ごさんじょう	摂関家の斜陽化
第72代	白河	しらかわ	院政の初め、源師房ら村上源氏重用
第73代	堀河	ほりかわ	後三年の役
第74代	鳥羽	とば	平氏を登用
第75代	崇徳	すとく	保元の乱で讃岐へ流さる
第76代	近衛	このえ	17才で崩御。ここまで鳥羽上皇の院政が及ぶ
第77代	後白河	ごしらかわ	3年で退位するが、以後5代に渡り院政
第78代	二条	にじょう	平治の乱
第79代	六条	ろくじょう	太政大臣：平清盛
第80代	高倉	たかくら	中宮：平徳子
第81代	安徳	あんどく	治承4年2歳で即位、8歳で入水

鎌倉時代(1185年～1333年)源頼朝が征夷大將軍になり鎌倉幕府を開く。源氏の支配は3代。

北条氏一族の執権政治は14代。その後、後醍醐天皇が台頭する。

第82代	後鳥羽	ごとば	新古今和歌集を勅撰
第83代	土御門	つちみかど	ここより鎌倉時代
第84代	順徳	じゅんとく	承久の乱で佐渡へ配流
第85代	仲恭	ちゅうきょう	明治になって歴代に加えられる
第86代	後堀河	ごほりかわ	鎌倉幕府傀儡
第87代	四条	しじょう	2才で即位、12才で崩御
第88代	後嵯峨	ごさが	北条泰時により即位
第89代	後深草	ごふかくさ	持明院統と大覚寺統の対立が始まる
第90代	龜山	かめやま	両統の対立続く
第91代	後宇多	ごうだ	文永・弘安の2度の蒙古襲来
第92代	伏見	ふしみ	両統の対立続く
第93代	後伏見	ごふしみ	対立激化、2年半で讓位
第94代	後二条	ごにじょう	大覚寺統の分裂
第95代	花園	はなぞの	才知、並外れた知識量の持ち主だった、という。
第96代	後醍醐	ごだいご	建武の中興、南北朝開始。吉野に潜幸。室町幕府誕生。

南北朝時代(南朝)(1336年～1392年)建武の中興から後小松天皇に讓位で両朝が合一まで

第97代	後村上	ごむらかみ	各地を転戦。生涯足利氏との戦い。
第98代	長慶	ちょうけい	父(後村上天皇)と同様戦いの生涯。大正15年98代天皇に。
第99代	後龜山	ごかめやま	南朝最後の天皇。京へ移り後小松天皇に讓位。

(北朝)

光厳	こうげん	後醍醐天皇は笠置に逃れ、北条氏により北朝初代天皇。
光明	こうみょう	後醍醐天皇から偽の神器をつかまされる。
崇光	すこう	足利尊氏・直義兄弟の対立が激化。
後光厳	ごこうげん	南朝方の攻撃から逃げ回る生涯。
後円融	ごえんゆう	足利義満の幕府。比較的安定の御代。
後小松	ごこまつ	6才で即位、10才で南北朝統一。実権は足利義満にあった。

室町時代(1336年～1573年)建武の新政ではじまり、足利尊氏が征夷大將軍になり室町幕府を開く。

南北朝時代は3代目將軍足利義満により北朝の勝利。応仁の乱で將軍権力失墜。

第100代	小松	ごこまつ	6才で即位、10才で南北朝統一。実権は足利義満にあった。
第101代	称光	しょうこう	南朝の反乱、各地で頻発。精神を病み28才で崩御。
第102代	後花園	ごはなぞの	36年に及ぶ長期在位。応仁の乱後出家。
第103代	後土御門	ごつちみかど	応仁・文明の乱は11年続き、都は荒廃。36年の在位。
第104代	後柏原	ごかしわばら	朝廷の貧窮は最悪を極める。
第105代	後奈良	ごなら	在位31年に及ぶが、戦乱、朝廷貧窮は変わらず。
第106代	正親町	おうぎまち	即位式は毛利元就の献金で。織田信長に勅命し室町幕府滅亡。

安土桃山時代(1573年～1603年) 織田信長の安土、豊臣秀吉の天下統一の桃山文化。秀吉の死後、関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利するまで。

第107代 後陽成 ごようぜい 秀吉から家康の間24年在位。天下統一。

江戸時代 (1603年～1868年) 徳川家康が征夷大将軍となり江戸幕府。幕府による皇室監視時代

第108代 水尾 ごみずのお 徳川幕府に抵抗を続ける。「禁中並公家諸法度」

第109代 明正 めいしょう 奈良時代以来の女帝。徳川の圧迫を逃れる為女帝が即位。

第110代 後光明 ごこうみょう 幕府に対し激しく抵抗。幕府による暗殺説も。

第111代 後西 ごさい 明暦の大化。皇居の炎上を理由に幕府は譲位を迫る。

第112代 霊元 れいげん 在位25年。幕府による監視。

第113代 東山 ひがしやま 13才で即位。以後23年在位。

第114代 中御門 なかみかど 10才で即位。27年在位。音律雅楽に造詣。

第115代 桜町 さくらまち 8代吉宗。9代家茂の時代。大嘗祭が復興さる。

第116代 桃園 ももぞの 学問を好んだが22才で崩御。

第117代 後桜町 ごさくらまち 女帝。次の後桃園天皇が幼かった為暫時即位。

第118代 後桃園 ごももぞの 叔母である後桜町天皇より譲位。世は田沼意次時代。

第119代 光格 こうかく 在位39年

第120代 仁孝 にんこう 公家の教育機関を創設。(現学習院大學)

第121代 孝明 こうめい 徳川慶喜に将軍を宣下、1週間後謎の死。

近代(1868年～) 大日本帝国で神格化し立憲君主制とするが、敗戦後の日本国憲法で象徴天皇。

第122代 明治 めいじ 王政復古の号令。大日本帝国の神となる。

第123代 大正 たいしょう 幼児より病弱。言語不明瞭。

第124代 昭和 しょうわ 第二次世界大戦。在位62年波乱の生涯。

第125代 今上 きんじょう 象徴天皇としての役割を試行錯誤、実践。